

おひとりさま事例集（3） ～愛着のある自宅に戻りたい～

今回の主人公は、高木康夫さん（85）です。子供のいないご夫婦で愛妻家でしたが、5年前に奥様を癌で亡くされました。

都心まで電車で40分ほどの郊外に建つ立派な日本家屋がご自慢で、亡くなった奥様とともにかなりこだわり抜いて建てたご自宅に、当時、康夫さんはひとりで過ごしていました。亡くなった奥様といろいろなところを旅行した思い出話を、たくさん聞かせてくださっていました。



そんな康夫さんが、ご自宅で倒れているところをケアマネージャーに発見され、入院することになりました。入院してからの康夫さんは、愛着のある自宅から離れて落ち着かないのか、食事が不味い、ベッドが固い、看護師が呼んでも来ない・・・など、これまでの穏やかだった様子が信じられないほど、不平不満を常に訴えるようになりました。

医者の診断では、このまま自宅に戻ってひとり暮らしをするのは困難で、リハビリ病院に転院して回復を確認してから帰宅を目指すか、高齢者施設に入居するか、どちらかにした方が良いとのことでした。

しかし康夫さんは、「何が何でも自宅に帰りたい」の一点張りでした。康夫さんの気持ちにとことん寄り添うために、難色を示すケアマネージャーや病院ソーシャルワーカーに掛け合って、自宅内部の段差確認や手すり設置の必要性などの調査に協力してもらい、居宅介護や訪問看護など介護保険を利用したサービスを立案してもらった上で、康夫さんは退院して念願の自宅に戻ることになりました。

しかし、退院したその日に自宅で転倒してしまい、再度、入院することになってしまったのです。

その後、リハビリ病院を経て、内臓疾患も発覚したため、康夫さんご自身も自宅でのひとり暮らしは無理だということを知り、介護付有料老人ホームに入居しました。

とはいえ、康夫さんの自宅への愛着が消えたわけではありません。そこで、康夫さんの体調を見ながら、ひと月に1回、入居中の老人ホームから自宅への外出の支援を行いました。ご近所への挨拶、ご近所の馴染みの床屋での散髪などにより、ご自慢の日本家屋の自宅での生活が叶わない寂しさを紛らわせることが出来たようです。

その後、2年程して康夫さんはお亡くなりになりました。結果として、自宅での生活に戻ることは出来ませんでした。康夫さんのお気持ちに寄り添い、一度本気で自宅に戻る準備をして差し上げたことで、康夫さんも心の整理が出来たのではないのでしょうか。